



Kazé



ルヴァン便りNo.2

2010.7.10

ルヴァン美術館のKazé。この風はたまに吹きます。
たまだから気持ちが良い、、、なのです。
今年は頼まれて、ぼくの作品や、コレクションを出します。
油絵よりも色紙絵やテラコッタの方が面白かった。
本当に楽しかった、自分が楽しんでカスを見てもらうのは、
ワルイ気がします。ゴメンなさい、でも見てくださいね。

西村八知 (ルヴァン美術館館長)



「ルヴァン美術館の子供たち」 油彩 西村八知

西村伊作の建築を訪ねて その2

旧西村自邸 (和歌山県新宮市・大正3年)

この春、国の文化審議会は、西村自邸を重要文化財に指定するよう答申を出しました。天国の伊作さんは「重文なんかにならなくてもいいよ。あれはバアーンと壊してしまえ。」と言うような気がしますが、しかし後世に功績を伝えるためにもお許しを願いたい。ということで今回はこの自邸を探り上げます。

この住宅の見所の一つは、家族のための住宅の先駆例ということです。そしてこの住宅の設計施工の経験、また、ここで子供たちを育て、持論の生活改善を実践したことが大きな自信となり、その後の彼の活躍につながりました。

玄関入って右手の居間・食堂は家族のための部屋です。このことは今では当たり前ですが、当時家の一番よい部屋は客のための部屋でした。つまり接客を第一から、家族の生活を第一とした住まいへの転換、このことを伊作さんは先駆的に実践したのです。

この住宅を作った経験や住宅研究の成果をまとめて著書『楽しき住家』を出版し、彼が広く社会で知られる大きな契機となりました。この頃はまだまだ封建的な家族観が色濃く残っていた時代でしたので、体面よりも実質本位の彼の主張はとても新鮮だったのです。この家での生活実践も多くの著述として結実し、教育家、生活改善のオピニオンリーダーとして知られるようになりました。こんなことをサラリとやってのけるのが伊作さんのすごいところです。

彼は米国の近代住宅から多くを学び、この住宅の内部の意匠や家具は木部を細く直線的で装飾を控えた当時の先端的なものです。外観は、軒先からこの地方の山間民家に見られるガンギと呼ばれる幕板をおろしているのが特徴です。

この家に、佐藤春夫が帰郷の際訪れ、「西班牙犬の家」「美しい町」などの作品の着想を得、また、富本憲吉を招いてともに陶芸をおこないました。そのほか、与謝野晶子が来訪したり、晩年、浅間(現軽井沢)高原教会の初代牧師を務めた沖野岩三郎もたびたび訪れました。

なお、現在この自邸は西村記念館として公開されています。



西村自邸 (現在西村記念館)

外観



食堂

伊作の欧米旅行日記

西村伊作は明治四十二（1909）年、二十五歳のとき欧米を初めて旅行し、その間のことを日記に記している。それは三月二十七日、横浜出航の日から始まり、七月十七日、サンフランシスコ出航の日で終わっている。伊作はこの旅行について自伝『我に益あり』で略記しているが、ここで紹介する日記はその原本といふべきものであり、また、彼の日記としても唯一のものである。

旅程は、横浜を出航してスエズを経てナポリで下船。その後イタリア・スイス・フランス・イギリスなど欧州各地を巡り、さらに大西洋を渡ってニューヨークへ。ボストンで弟の七分を訪ね、ロスアンジェルスで弟真子と落ち合い、サンフランシスコから太平洋航路で横浜に帰着している。

筆者はこの旅行記をずいぶん以前に入手し、貴重なものなのでいつか彼に興味を持つ人々に読んでいただけたらと思っていたが、今回、西村家の了解を得て本紙に掲載することとした。この旅行日記を通じて、世間で注目を集める以前の青年伊作の生の姿を知るとともに、約百年前の欧州航路や欧米各地の様子も楽しんでいただければと思う。

なお、この日記の筆致は走り書きに近く、彼自身そのまま公開することを想定して書いたものではないと考えられ、そのため文章は不備な点もある。このことについては斟酌してお読みいただきたい。文中の〇〇は判読不能な箇所、句読点は筆者が加筆したものである。

●明治四十二年三月二十七日（日）

横浜より欧州へは独逸の汽船で行く。三月廿七日 横浜棧橋にかゝり居る九千六百七十噸のルキトウィック号一等室一百三十五番へ乗る。一室二人 洗面器、筆筒、寝臺等二人前皆立派なるものが揃ふてある。独逸欧州航路のは恐らく日本へ来る船の中で一番美しい船であろう。食堂、喫煙室、貴女室、等の美なるは一寸人を驚かし得る。而もそれが金ピカや彫刻でゴテゴテとしたのでなく雪よりも白キエナメルが塗られたる。室内は鏡の如く磨かれたるヴァニッシュ塗りのファーニチュアや飾付がして、それが皆近頃はやる様式の直線式単純式で出来て居る。単純なる美術の嗜好を有する我々がまこと惑心するといふまでではないが満足するといふ可きである。

給仕は皆独逸人である。皆若い人計り中に十五才位な少年の〇〇に奇麗なのが居る。女の給仕も居る。皆英語がうまい。食堂へ入るとき御はんが出来たかといふたら、イエスサーと二人の給仕が声をそろへていふた。独逸人の様ではなかつた。食時はラッパで伝号する軍隊的。船が棧橋をはなれるときは甲板で勇壮なる音楽隊が曲を奏する。そして船が棧橋からはなれて見送人のハンケチや帽子が小さく見江にくゝなる迄音楽は鳴りつゝあるのだ。棧橋に立って居る人が遠く遠くかすかになる樂声を聞くと一寸涙を催すに値する。

右に富嶽の薄紅色なるを見る。紫雲横に棚引いて〇るは日本画である。東海道 伊豆半島の岸や箱根の山や近きは緑に遠きは藍にかすみで見ゆる。山腹数ヶ所煙の上るは野焼きである。大きな波のうねりもこの船にあまり〇〇を感じない。

夕食は七時より例のラッパ伝号。黒服に着かへて出る夜の食堂は実に綺麗だ。電気が煌めいて白い天井や食卓それから食器などを照して居る。楽隊は静かに奏樂しつつ間に食をとるのである。

夜は室に蒸気を通じたため、甚暖く朝迄よくねた。朝起きれば船は紀州沖を通りつゝある。朝食後湯に入る。湯漕はニッケルの輝ら輝らするやつで気もちがよい。

●三月二十八日（月）

湯から上るともう船は紀淡海峡を通過中。由良の港などが見へる。

正午に神戸へ着した。食事をせず上陸。同船の女医者医者ニウエルといふ人につれられてとオリエンタルホテルに行きビショップハウスに〇ヒテツフィンをよばれ、それぞれからゴムの人力車に乗つて三人連れで布引の瀑へ行った。五時の便船で本船にかえつた。雨がふり出しそうな空である。

女医者は何故か色々和我輩に話をしかける。そして早口でしゃべりどうしても分からぬ。分からないでも少しもかまわずに自分計り物いふて、〇が一ついふと後へ後へいつまでもなんかしゃべりだす。外の客をあまり好まぬ。独逸人など大にきらいであるといふて居る。此女は昨年〇ヶ月とか北里博士のバイ菌研究所に居つて細菌学をやつたといふて居る。そしてゲプロマをもらつた。日本に於て外国女が医学のゲプロマを貰たのは自分が初めてであるといふてよろこんで居る。東京に於てばメソヂストの老教師ハリスの宅に居たと、彼女のシスターが同家へ嫁つて居るからであるそうなる。それで神戸に於てハリス〇〇ふたので我輩も一しょに行つたのである。

●三月二十九日（火）

朝〇雨、午後になり雨やむ。tiffinの後Newell女史と共に神戸へ買物に行く。西洋人と日本人が神戸などの町を一しよに散歩して居ると、〇〇す日本人が西洋人のguideかinterpreterかと間違われる様に思ふ。町をあちらこちら歩いた故大につかれ海岸のベンチにてしばらく休む。夕食前に船に帰る。

神戸からは、乗客がふえた。多くは獨人である。彼等はdinnerの時にも酒を多くのみ大にさわぎやかましい。英国人なるNewell女史は彼等を甚だ不快に思ふと云ふ。獨逸人はどうしても其挙動が荒いらしい。夕食後にも喫煙室に於て酒をのみよたよたとなりてさわぎ居つた。日本人の若い二等客がニ三人乗り込んだらしい。一等の方には自分の他まだ一人も日本人はのつて居らぬ。船は夜十時過ぎに出帆した。

船の給仕は驚くべき記憶力を有する。何時に何せよといひ付けて置くと必ずしてある。食事の時にも多くの人々が色々の注文をするのに少しもわずれず誂へたものをもつて来る。実に工合がよい。そして、彼等は甚身軽である。手早くするすると全ての用事をする。

●三月三十日（水）

朝起きれば船はInland Sea 即ち中国内海を通りつゝある。

関門海峡は昼食後であつた。関門を出ると海が甚荒くなつた。内海通いの汽船などは甲板へひどい波をかぶつて走つて居るが、此船は少し計り動くだけである。十一時十五分前迄読書室でNewell女史と話して居つた。

●三月三十一日（木）

午前一時に長崎着。船はいつ着いたのか寝ており知らなんだ。夜中にやかましい音がするから何かと思ふて居つた。朝見れば多くの男女人夫が船から石炭を積入れつゝある。そして室の窓が少し開いて居つたので、そこから石炭の積入つて、まどの所が真黒になつて居る。

船へ多くの商人が入込んで来て、物品を陳列して皆にうり付けつゝある。我輩は〇して英語で話をしかけたりする。船は十時（午前）に出帆。

●四月一日（金）

朝三時半に起きた。陸が見へぬ。二等にある二人の日本人と甲板で一寸話をした。一人は友田〇〇と云う理学士。一人は寺田寅彦と云ふ帝大の助手。2人共獨逸へ留学する由。

読書室でペンク博士と云ふ獨人と話した。彼は一寸見ると学者らしくない只の商人の様である。彼は日本の新聞大阪朝日を見せた。それに彼の肖像が出て居て、彼が米国コロンビア大学で講義をした事や、京都大学で講義をなした事を書いてあつた。

正午頃船は止まった。潮が低いので満潮をまつて居るのであろう。しばらくしてPilot Boatが来た。それから我船も進行しだして夜になつて上海沖に着いた。



「甲板ゲームを見る人々」 油彩
西村 伊作

2010年度 ルヴァン美術館のご案内

6月12日(土)～11月3日(水) 2010年

水曜日休館(但し7月15日～9月15日は無休)

10:00～17:00

*8月28日(土) 臨時休館[8月27日(金)は15:00閉館]

企画展：「西村八知 - 恋人としての作品展」

油彩、水彩、テラコッタ、スケッチ、パピエ・コレ他

「西村八知コレクションの画家たちの作品」

セルジュ・ポリャコフ、アントニー・タピエス、P. ゴーギャン、P. ラブラード他

常設展：「西村伊作と文化学院に携わった芸術家たちの作品」

西村伊作、与謝野晶子、裕伊之助、石井伯亭、赤城泰舒、中川紀元、

有島生馬、山下新太郎、ソノ・西村・ベガード 他



西村八知 Hatch Nishimura

1922年、文化学院創立者西村伊作の三男として和歌山県新宮に生まれる。文化学院、東京美術学校(現・芸大)卒業後渡仏し、ヨーロッパ、中東などの史跡、美術館を訪れる。帰国後文化学院で教鞭をとり、1988年より2007年まで校長を務める。

1997年、軽井沢ルヴァン美術館を設立。

ルヴァン美術館館長。

ルヴァン サマーコンサート

- | | |
|--|----------|
| ①サバトス/ボサノバコンサート(木村純・三四郎) | 8月14日(土) |
| ②近藤和花ピアノコンサート | 8月21日(土) |
| ③守屋剛志ヴァイオリン・結城奈央ピアノデュオコンサート
(軽井沢ペット福祉協会チャリティ-コンサート) | 9月18日(土) |
| 開場: 18:00 開演: 18:30 | ¥3,000 |

コカリナの音楽会—黒坂 黒太郎/矢口周美ボーカル

(西村伊作記念館を守り伝える会のチャリティー)

開場: 14:00(ケーキとお茶の会) 開演: 15:00 ¥2,500

第7回 秋のアートフェスティバル 入場無料 10:00～17:00 9月19日(日)

*西村八知による展覧会の解説及びトーク 9月19日(日)13時～

● コンサートのお申し込みはルヴァン美術館0267-46-1911へ

☆ カフェテラスCafé Le Vent、ミュージアムショップLe Ventは常時ご利用いただけます

ルヴァン美術館：〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町長倉957-10 Tel: 0267-46-1911 Fax: 0267-46-1910

東京事務所：〒107-0052 港区赤坂9-6-14 Tel & Fax: 03-3401-8896 <http://www.levent.or.jp>